

平岩弓枝

山茶花は見た

御宿かわせみ

〔四〕





文春文庫

168—15

山茶花は見た 御宿かわせみ 4

定価 280円

1980年11月25日 第1刷

著 者 平 岩 弓 枝

発行者 杉 村 友 一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文 春 文 庫

山 茶 花 は 見 た

御宿かわせみ 4

平 岩 弓 枝



文 藝 春 秋

山茶花は見た・目次	
山茶花は見た	7
女難 剣難	40
江戸の怪猫	67
鴉を飼う女	95
鬼女	126
ぼてふり安	161
人は見かけに	190
夕涼み殺人事件	220

山茶花は見た

山茶花は見た

一

たいして広くもない「かわせみ」の庭には花のある木が多かった。

梅は白梅と紅梅、桜は玄関脇わきに一本、客用の部屋から見渡せる中庭には小さいが藤棚ふじだながあり、裏には桐きりが春の終りに紫の花を開く。

夏の盛りには、るいの居間の外に百日紅さるすべりがかなり長い間、咲き続けるし、秋には嘉助の丹精した菊と、花とはいい難いが、楓かえでと柿かきが真紅に色づいて風情を添えた。

そして、ぼつぼつ、初霜をみる朝には、るいの居間と女中部屋との間にある小庭に山茶花さざんかが咲く。

「おい、今年はちつとばかり早いんじゃないか」

「かわせみ」へ泊った翌朝に、珍しく早起きして木剣の素振りをしていた東吾が、居間で茶の仕度をしている、るいに呼びかけた。

山茶花のことだと、るいもすぐ気がついて縁側へ出る。

成程、南へむかった中ほどの枝に、白と桃色をばかしたような花が二つばかり咲いている。

東吾がいうように、例年よりも十日ばかり早い感じであった。

「よく、花の咲く日なんぞをおぼえていらっしゃいますのね」

それだけ、東吾が「かわせみ」に馴染んだ証拠のようで、るいは嬉しかったが、花の咲く日をおぼえているというのが、如何にも東吾らしくなく思えて、つい、いった。

「この花だけはおぼえているのさ。大方、るいの、生まれた日のあたりに咲き出すだろう」
その日は必ずといってよいほど、るいのところへ泊るし、

「朝起きてみると、よくお前がいうじゃないか。やつと山茶花が咲きました……」

大声でいう東吾に、るいは赤くなって指を一本、唇にあてた。

「そんな大きな声でおっしゃると、女中達に聞えますよ」

いわれてみれば、東吾に抱かれた翌朝に、この花の咲いているのをみつけ、なにか花やいだ気分、まだ布団の中に居る東吾に声をかけたおぼえがある。

「あと九日で、お前の生まれた日だな」

いくつになると、なんの気なしに東吾はきいたのだが、るいはつんとして、そっぽをむいた。

「もう、お婆さんでございます」

「馬鹿……」

年上女房は、そんなつまらないことも気になるのかと、東吾は笑い出した。

「なにか買ってやるつもりだが、欲しいものはないか、どうせのことなら、るいの欲しいものが

いいだろう—

機嫌きげんをとるように東吾はいったが、るいは微笑して首をふった。

「なんにも……別に欲しいものはございません」

「みくびるなよ、千両箱を一つくれといわれても困るが、俺おれだって、それくらいの金はある、このところ、稼かせぎがいいんだ」

男にそういわれて、るいは慌わてた。

次男坊の冷や飯食いの東吾であった。いわゆる侍の扶持ふちはもらっていないが、兄の通之進は八丁堀の与力筆頭で、神林家はかなり裕福であったし、兄嫁の香苗が気を遣よっていて、東吾に金の不自由はさせていない。

それに、東吾自身も狸穴ますあなの道場へ月の中、半分は代稽古だいげいこに行ったりして、そっちからの謝礼もあって、けっこうのんきな次男坊暮らしを楽しんでいるのだが、るいにしてみれば誰のために、東吾が養子にも行かず、いつまでも兄の家の居候いこうをしているのかと、心が痛むのであった。

「なにかいってみろよ、どうせのことなら、一緒に買い物に出かけてもいい。今のところ懷中もあつたかだから、せいぜい奮発してやるぞ」

年下の亭主は木剣をふり廻しながら、いばっている。

「でしたら、おねだりしたいものがございます—
思いついて、るいは甘えた。

「なんだ」

「掛け守まもりのよいのをみつけたのがございます、日本橋の伊勢屋で……」
骨董こつどうを商う店であった。

平安時代あたりのものだろうか、その頃の女が胸にかけていた銀細工の掛け守が店に出ていた。筒を横にしたような形で、掛け金はずすと中に小さな持仏が入るようになっていた。

「変ったものが所望なんだな」

そういうものなら売ってしまうといいけないといい、早速、伊勢屋へ行ってみようと東吾が勧め、結局、二人は肩を並べて、大川端を出た。

初冬にしては暖かい日で、大川には陽炎かげろうが立ちそうな気配である。

「山茶花が早く咲く筈はずだな」

着流しに羽織なしでも、寒くない。

久しぶりに二人そろって外へ出たことで、それでなくとも、るいは上気していた。

伊勢屋の店に、るいがみつけた掛け守は、幸い、まだ売れずにあった。

「こういうものは、なかなかお客様の眼まなこに止りませんが、よいものでございます」

おそらく公卿きうけいの然るべき家の姫君が身につけていたものでもあろうと、伊勢屋の亭主はいった。

掛け守の外側はさりげない細工だが、裏には和紙を張って、それに、うるしをかけ、更に美しい蒔絵まきえをほどこしてある。

中におさめられているのは観世音菩薩くわんおんぼさつで、これも小さいが、いいお顔をした仏像であった。そんないいものなのに、買い手がないせいとか、値はそれほど高くない。

「売れていなくてよかったな」

掛け守の包をいそいそと胸に抱いたるいに東吾は嬉しそうに笑った。

本当なら、そのまま、るいと別れて八丁堀の屋敷へ帰る筈なのに、あまり、るいが喜んでいるので、なんとなく別れづらくなって、そのまま大川端の「かわせみ」へ戻ってきてみると、ちょうど、客が来ていた。

品川の廻船問屋「万石屋」の主人で新兵衛という、「かわせみ」には常連の客であった。

所用でこっちへ出てくる時は、必ず「かわせみ」を常宿にして滞在する。

「ちょうどようございました。旦那様、只今のお話をこちらの若様におっしゃってみては如何でございましょう、八丁堀の与力をなすっていらっしゃる神林通之進様の弟御様で、きつとお力になつて下さると存じますが……」

番頭の嘉助が心得顔で新兵衛に東吾を引き合せ、なんとなく、東吾はるいと一緒に、楓の間で、万石屋新兵衛の話をきく破目になった。

「なにからお話し申してよいやら……」

五十をいくつか過ぎて、廻船問屋の主人にしては、温厚すぎるような新兵衛が、ためらいがちに話し出したのは、この秋の彼岸に万石屋へ押し入った盗賊のことであった。

「それ以前から、品川あたりの商家が軒並みに襲われて居りまして、手前どもでも随分、要心をしていましたが、悪い時には、とかく悪いことにつけ込まれるものでございまして……」

新兵衛の一人娘お信の乳母だったおせいという女が、九月のはじめに卒中で倒れて、そのまま

昏睡状態が続き、その看病やらなにやらで家中が疲れ切っていた。

「賊は蔵に押し入りました」

蔵の扉には勿論、鍵がかかっていたのだが、賊は難なく鍵をこわして侵入し、たまたままゝまゝ金が入った時で、千両からあった金箱を盗み出して行った。

「家中の者はよく眠って居りまして、誰も朝まで気がつかない筈でございましたが、折柄、乳母の娘のおきくというのが、木更津から来て居りまして、看病のため起きて居ましたのが、物音をききつけて、手水場の窓から外をみたそうでございます」

それが、ちょうど盗賊三人が金箱を運んで逃げ出すところで、

「おきくは腰を抜かささんばかりに驚いて、私のところへ知らせに参りました」
廻船問屋のことで、店の二階には腕っ節の強い連中が寝起きをしている。

「それとばかりに得物を持ってとび出しまして、手分けして追いかけてました」

その時は、賊の姿はもう見えなかったのだが、柝を叩いて町内にも知らせ、土地の岡っ引なども繰り出してあっちこっちの木戸をふさいだりしている中に、近くの媽祖廟の境内にかくれていた三人の賊らしい男を発見した。

あとは大勢が集まって来て、かなり抵抗する賊をとり押えたのだが、

「最初、奴らは盗みに入ったおぼえはないとしらを切りました」

実際、どこへかくしたのか、三人とも金は持って居らず、調べに当たった者も途方に暮れたが、結局、犯人を手水場の窓から見たおきくが首実検をして、

「三人の中の一人は右腕に赤アザがあったと申し立てましたので……」

確かに、媽祖廟で捕えられた一人は右腕の部分にかなり大きな赤アザがあり、それで万石屋へ押し入った三人組に間違いないということになった。

代官所のほうで、いろいろ調べてみると、それが七化けの太郎次という男を首領にした盗賊で、品川にあいついで起った押し込みも彼らの仕業に違いないことがわかり、間もなく、三人は八丈島送りとなった。

「あとからきいたことですが、本当なら、もっと重いお仕置になる筈のものが、命を助けたのは、盗みためた金のありがた、どうしてもわからなかったからで……奴らを生かしておいて、なんとか、金のかくし場所を白状させたいお上の方針とか承りました」

七化けの太郎次一味が、その頃に盗んだ金は品川だけでも、およそ三、四千両になっている筈で、

「盗みを働いてから、奴らが捕まるまでに、あまり日数も経^たって居らず、どんな使い方をしても、金をそっくり使い切ることはあるまいと思われますし、必ず、どこかにかくしてあるに違いないと、お上もかなりきびしく責めたそうでございますが、三人とも金のかくし場所は一味の中の卯之吉というのにまかせていて、自分達は五千両たまったら分け前を受けとることになっていて知らないといひ張ったようでございます」

彼らの申し立てによると、金を盗む者と、その金を受け取ってかくし場所へ運ぶ者とは常に分れていて、盗みのほうは七化けの太郎次が指揮をとり、金をかくすほうは太郎次の弟である卯之

吉が指図をしたという。

つまり、追手がかかった時には、金を持って逃げるのは困難だし、追手の眼をくらすためにも、仲間を二つに分けて行動するほうが安心だと考えていたらしい。

「よく、すりがすりとったものを、仲間へあずけて逃げるように、そんな手を使ったものでもございましょうか」

その夜、万石屋から盗み出した千両の金も、万石屋の裏で待っていた卯之吉らに渡し、自分達は身軽になって逃げたと、三人ともがいった。

「実際、捕まった時、奴らは一両の金も持っては居りませんでした」

「しかし、おかしいではないか」

黙ってきいていた東吾が、はじめて口をはさんだ。

「太郎次達が捕まるほど、追手の数が出たというのに、どうして卯之吉のほうは逃げられたのだ。千両箱を持って、そう早く走れもしまい」

どちらかというと身軽な太郎次のほうが、現場近くにうろうろしていて、金を持ったほうが逃げ切っている。

「それが奴らの手でございましょう。金を無事に持ち出すために、太郎次達はおとりになったのかも知れません」

案外、近くにかくれ家があるのではないかと、そっちもしつこいぐらいに詮議せんぎしたが、

「私どものあたりは、みな古い商家でございまして、近所も親代々そこに住みついている者ばかり

りで……—

うさんくさい家は一軒もない。

「お上では、よほど巧みに変装でもして逃れ去ったのではないかとみているようでございます—

「太郎次たちは、卯之吉らの住み家は知っているだろう、それも白状しなかつたのか—

「いえ、それは申したそうでございます—

大森海岸に近い空屋敷が一味のかくれ家で、すぐに捕手がむかつたが、もう誰も居らず、その家の床下から天井裏まで探しても、金は出て来なかつたという。

「なんとも歯がゆい話でございますが……—

太郎次達は遠島になり、金は出ないままに日がすぎた。

「十日ほど前に、代官所のお手先の方から知らせがございまして、太郎次達が島抜けをしたそうでございます—

おそらく仲間が、漁船でも都合してはるばる脱出の手助けに行ったものだろうが、季節はずれの嵐あらしの日に、監視の眼をくぐって、島から逃げ、そのまま行方知れずだという。

「嵐の夜のこと、そのまま海に吞のまれてもしたのならよろしゅうございますが、ひょっとして江戸へ舞い戻って来ないとは申せません。そこで、心配になりますのは、乳母の娘のおきくのことです……—

一度は容疑が晴れかかった盗賊達が、遂ついにごま化し切れなかつたのは、おきくが首実検をしたからであつた。